



## CUSTOMER (顧客)

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム

ドキュメントバージョン: 4.1, Support Package 11 – 2018/02/16

# サポートパッケージアップデートガイド

# 目次

<b>1</b>	<b>ドキュメント履歴</b>	<b>4</b>
<b>2</b>	<b>はじめに</b>	<b>5</b>
2.1	このドキュメントについて	5
	制約	5
	変数	5
	用語	6
<b>3</b>	<b>計画</b>	<b>8</b>
3.1	アップデートパッケージのダウンロード	8
3.2	プラットフォームのサポート	9
3.3	前提条件	10
3.4	制限事項	10
3.5	インストールされているバージョンの確認	12
<b>4</b>	<b>インストールシナリオ</b>	<b>13</b>
4.1	複数の SAP BusinessObjects 製品を含むシステムへのアップデートの適用	13
4.2	Web アプリケーションの更新	13
4.3	web.xml ファイルの変更の保存	13
4.4	並列更新	14
<b>5</b>	<b>Windows での更新インストール</b>	<b>16</b>
5.1	Windows に BI プラットフォームサーバのアップデートをインストールする	16
5.2	Windows でクライアント製品アップデートをインストールする	17
5.3	Windows でのサイレントインストール	18
	Windows で応答ファイルを使用したサイレント インストールを実行する	18
5.4	アップデートインストールの段階的インストールを実行する	19
5.5	Windows でアップデートをアンインストールする	20
<b>6</b>	<b>UNIX でのアップデートインストール</b>	<b>22</b>
6.1	UNIX に BI プラットフォームサーバのアップデートをインストールする	22
6.2	UNIX でのサイレントインストール	23
	UNIX で応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行する	23
6.3	UNIX でアップデートをアンインストールする	24
<b>7</b>	<b>Sybase SQL Anywhere への移行</b>	<b>26</b>
7.1	Microsoft SQL Server 2008 Express から	27

4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する (Windows).	27
CMS データを SQL Anywhere にコピーする (Windows).	28
Microsoft SQL Server 2008 Express を削除する.	31
7.2 IBM DB2 Workgroup Edition から.	32
4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する (UNIX).	32
CMS データを SQL Anywhere にコピーする (UNIX).	33
IBM DB2 Workgroup Edition を削除する.	35

# 1 ドキュメント履歴

以下の表は、重要なドキュメント変更の概要です。

バージョン	日付	説明
BI プラットフォーム 4.1 サポートパッケージ 1	2013 年 8 月	このドキュメントの初版です。
BI プラットフォーム サポートパッケージ 2	2013 年 11 月	<ul style="list-style-type: none"><li>• <code>web.xml</code> ファイルの変更の保存の節を追加</li><li>• 並列更新の新機能についての説明の節を追加</li><li>• アップグレードのサポートの節を変更</li><li>• Sybase SQL Anywhere への移行の節を追加</li><li>• Design Studio アドオンの更新方法に関する追加情報</li><li>• インストールされているバージョンの確認の節を変更</li></ul>
BI プラットフォーム サポートパッケージ 2	2014 年 3 月	<ul style="list-style-type: none"><li>• BI 4.1 サポートパッケージ 03 の Web Intelligence に関する制限事項の節にエントリを追加</li></ul>
BI プラットフォーム サポートパッケージ 7	2015 年 11 月	ブランド変更により更新しました。
BI プラットフォーム サポートパッケージ 8	2016 年 6 月	Windows の段階的インストールを追加しました。 <a href="#">アップデートインストールの段階的インストールを実行する [19 ページ]</a>
BI プラットフォーム サポートパッケージ 10	2017 年 7 月	以下のトピックが 2 つの KBA についての情報で更新されました。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Windows での更新インストール</li><li>• UNIX での更新インストール</li></ul>
BI プラットフォーム サポートパッケージ 11	2018 年 2 月	ブランド変更によりガイドを更新しました。

## i 注記

並列更新の節で説明されているとおり、並列に更新をインストールする場合は分散デプロイメントの更新が高速で行われます。

## 2 はじめに

### 2.1 このドキュメントについて

このドキュメントは、SAP BusinessObjects Business Intelligence Suite 製品 のインストール、およびメンテナンスを行うシステム管理者または IT プロフェッショナルを対象にしています。このガイドはリリースの制限および修正された問題ドキュメントと一緒に読むことをお勧めします。このドキュメントには制限、回避策、およびアップデートで対処された不具合に関する情報が記載されています。

アップデートのタイプごとに異なるガイドが用意されています。

アップデートに関する適切なガイドの選択

アップデートのタイプ	例	ガイド
最新のマイナーリリースを使用した BI Suite のアップデート	<ul style="list-style-type: none"><li>4.0 リリースへの 4.1 のインストール</li></ul>	BI プラットフォームマイナーリリースアップデートガイド
最新のサポートパッケージを使用した BI Suite のアップデート	<ul style="list-style-type: none"><li>4.1 SP9 リリースへの 4.1 SP10 のインストール</li></ul>	サポートパッケージアップデートガイド
4.1 リリース用の最新のパッチアップデートを使用した BI Suite のアップデート	<ul style="list-style-type: none"><li>4.1 SP10 リリースへのパッチ (例: 0.1) のインストール</li></ul>	パッチ 10.x アップデートガイド

#### → ヒント

4.1 サポートパッケージは 4.0 または 4.1 リリースの上に直接インストールできます。たとえば、4.0 SP2 リリースに 4.1 SP10 を直接インストールできます。

#### 2.1.1 制約

このガイドでは、ホストオペレーティングシステムのセットアップ方法、サポートされているデータベース、Web アプリケーション サーバー、または Web サーバについて説明していません。専用のデータベース、Web アプリケーションサーバ、または Web サーバを使用する場合、BI プラットフォームをインストールする前にこれをインストールし機能させておく必要があります。これらのコンポーネントのインストールとアップグレードの詳細については、各コンポーネントのマニュアルを参照してください。

#### 2.1.2 変数

以下の変数は、このマニュアル全体を通して使用しています。

変数	説明
<INSTALLDIR>	BI Suite のインストールディレクトリ。  Windows マシンの場合、デフォルトのディレクトリは C: ¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects ¥です。

## 2.1.3 用語

BI プラットフォームのドキュメントでは、次の用語が使用されます。

用語	定義
アドオン製品	BI プラットフォームで動作する一方、独自のインストールプログラムがある製品で、SAP BusinessObjects Explorer などがあります。
監査データストア (ADS)	監査データを保存するために使用されるデータベースです。
BI プラットフォーム	SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームの略語です。
バンドルされたデータベース、バンドルされた Web アプリケーションサーバ	BI プラットフォームに同梱されているデータベースまたは Web アプリケーションサーバのことです。
クラスタ (名詞)	1 つの CMS データベースを使用し、同時に動作する 2 つ以上の Central Management Server (CMS) です。
クラスタ化する (動詞)	クラスタを作成することです。  たとえば、クラスタを作成するには以下の手順に従います。  1. マシン A に CMS および CMS データベースをインストールします。  2. マシン B に CMS をインストールします。  3. マシン B の CMS がマシン A の CMS データベースを使用するように指定します。
クラスタキー	CMS データベースでキーを解読するのに使用されます。  CCM を使用してクラスタキーを変更できますが、パスワードのようにキーをリセットすることはできません。暗号化されたコンテンツが含まれており、紛失しないようにすることが重要です。
CMS	Central Management Server の略語です。

用語	定義
CMS データベース	BI プラットフォームに関する情報を保存するために CMS で使用されるデータベースです。
デプロイメント	1 つ以上のマシンにおいてインストール、設定、実行されている BI プラットフォームソフトウェアのことです。
インストール	インストールプログラムによって 1 つのマシン上に作成される BI プラットフォームファイルのインスタンスです。
マシン	BI プラットフォームソフトウェアがインストールされるコンピュータです。
メジャーリリース	4.0 のような、ソフトウェアのフルリリースです。
移行	BI コンテンツを以前のメジャーリリース (XI 3.1 など) から、アップグレード管理ツールを使用して移行するプロセスです。  この用語は、同じメジャーリリースのデプロイメントには適用されません。昇格を参照してください。
マイナーリリース	4.1 のような、ソフトウェアの一部のコンポーネントのリリースです。
ノード	同じマシンで実行され、同じ Server Intelligence Agent (SIA) で管理される BI プラットフォームサーバのグループです。
パッチ	特定のサポートパッケージバージョンの小規模な更新です。
昇格	BI コンテンツを同じメジャーリリース (4.0 から 4.0 など) のデプロイメント間で、プロモーションマネジメントアプリケーションを使用して移行するプロセスです。
サーバ	BI プラットフォームのプロセスの 1 つです。サーバは、1 つ以上のサービスをホストします。
Server Intelligence Agent(SIA)	サーバの停止、起動、起動など、サーバのグループを管理するプロセスです。
サポートパッケージ	マイナーリリースまたはメジャーリリースに対するソフトウェアの更新です。
Web アプリケーションサーバ	動的コンテンツを処理するサーバです。たとえば、4.1 用にバンドルされた Web アプリケーションサーバは Tomcat 8 です。
アップグレード	移行プロセスを完了するために必要な計画、準備、移行、後処理のことです。

## 3 計画

### 3.1 アップデートパッケージのダウンロード

個別のフルインストールプログラムを持つ各 BI Suite 製品では、個別のアップデートパッケージを使用できます。以下の手順の表を参照して、ご使用の製品向けの適切なパッケージを特定してください。

1. <https://support.sap.com/home.html> > [ソフトウェアダウンロード] に移動します。
2. [ソフトウェアの検索] タブで [A-Z Index] の下の [Support Packages and Patches] をクリックします。
3. 以下のように、製品にナビゲートします。

アップデートパッケージ	パス
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサーバ [1]	▶ B ▶ SBOP BI platform (former SBOP Enterprise) ▶ SBOP BI PLATFORM (ENTERPRISE) ▶ SBOP BI PLATFORM 4.1 ▶ SBOP BI PLATFORM SERVERS 4.1 ▶
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームクライアントツール [1] [2]	▶ B ▶ SBOP BI platform (former SBOP Enterprise) ▶ SBOP BI PLATFORM (ENTERPRISE) ▶ SBOP BI PLATFORM 4.1 ▶ SBOP BI PLATFORM CLIENTS 4.1 ▶
SAP Crystal Reports 2013	▶ C ▶ CRYSTAL REPORTS ▶ SAP CRYSTAL REPORTS 2013 ▶ SAP CRYSTAL REPORTS 2013 ▶ [1]
SAP Crystal Reports for Enterprise	▶ B ▶ SBOP BI platform (former SBOP Enterprise) ▶ SBOP BI PLATFORM (ENTERPRISE) ▶ SBOP BI PLATFORM 4.1 ▶ CR FOR ENTERPRISE 4.1 ▶
SAP BusinessObjects Live Office	▶ B ▶ SBOP BI platform (former SBOP Enterprise) ▶ SBOP BI PLATFORM (ENTERPRISE) ▶ SBOP BI PLATFORM 4.1 ▶ SBOP LIVE OFFICE 4.1 ▶
SAP BusinessObjects Dashboards	▶ D ▶ SBOP DASHBOARDS (XCELSIUS) ▶ SBOP DASHBOARDS 4.1 ▶ SBOP DASHBOARDS 4.1 ▶
SAP BusinessObjects Explorer	▶ E ▶ SBOP EXPLORER ▶ SBOP EXPLORER 4.1 ▶ SBOP EXPLORER 4.1 ▶

- [1] SAP BusinessObjects Edge Business Intelligence もこのアップデートパッケージの対象です。
- [2] 次のようなクライアントツールがあります。
  - Web Intelligence リッチ クライアント
  - ビジネスビューマネージャ
  - レポート変換ツール
  - Web サービススクエリツール



- ユニバースデザインツール
- Query as a Web Service
- インフォメーションデザインツール
- トランスレーションマネジメントツール
- データフェデレーション管理ツール
- SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム向けウィジェット
- 開発者用コンポーネント:
  - SAP BusinessObjects BI プラットフォーム Java SDK
  - SAP BusinessObjects BI プラットフォーム Web サービス SDK
  - SAP BusinessObjects BI プラットフォーム .NET SDK
  - SAP Crystal Reports Java SDK
  - SAP BusinessObjects セマンティックレイヤ Java SDK

4. プラットフォームを選択します。

5. アップデートパッケージを選択し、Web サイトの説明に従ってパッケージをダウンロードおよび抽出します。

4.1 マイナーリリースアップデートの場合は、[タイトル] 列に「4.1 - Update」(または SAP Crystal Reports 2013 の「2013 - Update」)とあるパッケージを選択します。

サポートパッケージのバージョンは、[タイトル] 列に一覧表示されます。

パッチのバージョンは、[タイトル] 列に一覧表示されます。

ソフトウェアのダウンロードには時間がかかることがあります。システム管理者に連絡して、会社のファイアウォールがダウンロード処理を終了しないようにする必要があります。

## 3.2 プラットフォームのサポート

次の表に、各アップデートパッケージがサポートするプラットフォームを示します。

アップデートパッケージ	Windows	AIX	Solaris	Linux
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームサーバ	✓	✓	✓	✓
SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームクライアントツール	✓			
SAP Crystal Reports 2013	✓			
SAP Crystal Reports for Enterprise	✓			
SAP BusinessObjects Live Office	✓			

アップデートパッケージ	Windows	AIX	Solaris	Linux
SAP BusinessObjects Dashboards では、	✓			
SAP BusinessObjects Explorer	✓	✓	✓	✓

### 3.3 前提条件

アップデートをシステムに適用する前に、次の計画手順を実行することをお勧めします。

- 4.0 デプロイメントから 4.1 デプロイメントに更新する場合は、CMS データベースをバックアップすることをお勧めします。4.1 アップデートをアンインストールしても、4.0 データベースは復元されません。手動で復元する必要があります。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。
- 既存の BI Suite デプロイメントをバックアップします。デプロイメントのバックアップの詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

#### i 注記

BI プラットフォーム CMS に IBM DB2 を使用している場合は、4.1 アップデートインストールプログラムを実行する前に、CMS システムデータベースのバックアップをとることをお勧めします。CMS データベースの破損を回避するために、アップデートインストール処理中は CMS データベースを起動して実行中にし、アップデートプロセスが中断しないようにしてください。

- インストールしたアドオン製品を含む BI Suite デプロイメントのすべての要素に、更新後の BI プラットフォームのバージョンとの互換性があることを確認してください。
- リリースの制約ドキュメントを参照して、リリースの重要な問題、制限事項、および回避策を確認します。
- 解決済み問題ドキュメントを参照して、アップデートで修正された不具合が自分のデプロイメントに関係があるかどうかを確認します。
- SAP BW デザインタイムの機能強化を有効化にするには、Business Intelligence プラットフォームインストールガイドの SAP Support for BW を参照してください。
- 更新が必要なすべての SAP BusinessObjects 製品とコンポーネントを特定します。
  - Windows では、インストール済みのアップデートは Windows の [プログラムの追加と削除](#)の一覧で確認することができます。
  - Unix では、インストール済みのアップデートは、<INSTALLEDIR>/modifyOrRemoveProduct.sh を実行することで確認できます。
- このガイドの「インストールシナリオ」を確認します。

### 3.4 制限事項

アップデートのインストールには、次の制限事項が適用されます。

- アップデートは製品全体のインストールではなくメンテナンスのインストールです。アップデートをインストールするには、SAP BusinessObjects 製品がインストールされている必要があります。
- アップデート全体をインストールする必要があります。アップデートの一部をインストールすることはできません。
- アップデートは、すでにインストールされている機能のみを更新します。例:
  - たとえば、更新するフルインストールがカスタムインストールである場合、アップデートをインストールすると、最初にインストールされたファイルのサブセットのみが更新されます。
  - リリースで新しい機能が導入された場合、それらはアップデートインストールプログラムによってはインストールされません。新しい機能を取り入れるには、インストールを変更する必要があります。インストールの変更方法については、*Business Intelligence Platform インストールガイド*で、*SAP BusinessObjects Business Intelligence* プラットフォームを変更するを参照してください。
- アップデートにより、すでにインストールされている言語パックのみに修正が適用されます。アップデートで導入された言語をインストールする場合は、フルインストールを実行する必要があります。
- SAP BusinessObjects Suite デプロイメントのすべての製品を同じメンテナンスレベルにする必要があります。
  - デプロイメントの SAP BusinessObjects 製品の 1 つを更新する場合は、他のすべての製品も更新する必要があります。
  - デプロイメントの 1 つの SAP BusinessObjects 製品のアップデートをアンインストールする場合は、すべての製品の同じアップデートをアンインストールする必要があります。
  - 新しい SAP BusinessObjects 製品をインストールする場合は、デプロイメント内の他のすべての製品と同じバージョンになるまで、新しい製品にすべてのアップデートを適用してください。
- パッチは、特定のサポートパッケージレベルを対象としています。たとえば、ソフトウェアがサポートパッケージ 4 レベルの場合は、サポートパッケージ 5 向けのパッチをインストールすることはできません。パッチをインストールするには、サポートパッケージ 5 レベルにアップグレードする必要があります。
- 同じサポートパッケージレベル向けのパッチは累積されています。そのため、同じレベルのサポートパッケージ向けの以前のパッチをインストールする必要はありません。
- アップデートインストールプログラムでは、バンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバに BI プラットフォーム Web アプリケーションを自動的に再デプロイできます。異なる Web アプリケーションサーバを使用している場合、アップデートのインストール後に WDeploy を使用して BI プラットフォーム Web アプリケーションを再デプロイする必要があります。  
詳細については、[Web アプリケーションの更新 \[13 ページ\]](#)を参照してください。
- ユーザが使用して実行する同じインストールプログラムを使用して、応答ファイルを作成する必要があります。旧リリースまたはフルインストールとアップデートインストール間の応答ファイルを再利用することはできません。  
詳細については、[Windows で応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行する \[18 ページ\]](#)または [UNIX で応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行する \[23 ページ\]](#)を参照してください。
- このインストールプログラムでは、SAP BusinessObjects Design Studio BI プラットフォームアドオンは更新されません。4.0 リリースを 4.1 リリースに更新する場合、Design Studio は動作しません。SAP ノート 1760372 <http://service.sap.com/notes> で説明されているように、Design Studio BI プラットフォームアドオンをインストールする必要があります。
- BI 4.1 サポートパッケージ 03 の Web Intelligence には、XI 2.x、XI 3.x、XI 3.1.x、および BI 4.0.x の以前のバージョンの修正が含まれています。XI 3.x または BI 4.0 から BI 4.1 サポートパッケージ 03 に移行された Web Intelligence ドキュメントは異なる結果が表示される場合があります。考えられる相違点の詳細については、<http://scn.sap.com/docs/DOC-39973>にあるホワイトペーパーを参照してください。

## 3.5 インストールされているバージョンの確認

次のいずれかの方法を使用して、インストールした BI プラットフォームのバージョンを確認します。

- Windows デプロイメントの場合、プログラムの追加と削除 (ARP) を使用します
- Unix または Linux デプロイメントの場合、`modifyOrRemoveProducts.sh` を実行します。

### BI 製品およびクライアントツール

▶ [ヘルプ](#) ▶ [バージョン情報](#) ▶ メニューから、BI プラットフォームクライアントツールおよび SAP Crystal Reports といった他の SAP BusinessObjects BI 製品の最新のバージョン情報を確認できます。

## 4 インストールシナリオ

### 4.1 複数の SAP BusinessObjects 製品を含むシステムへのアップデートの適用

製品は相互に依存するため、すべての SAP BusinessObjects 製品を同じメンテナンスレベルにする必要があります。たとえば、SAP BusinessObjects Live Office および BI プラットフォームもインストールされているデプロイメントの SAP Crystal Reports にアップデートを適用する場合は、これらの 3 製品すべての 3 つのアップデートすべてを個別に適用して、すべての製品が同じメンテナンスレベルで実行されるようにする必要があります。

### 4.2 Web アプリケーションの更新

BI プラットフォーム Web アプリケーションを更新する方法は、使用している Web アプリケーションサーバの種類により異なります。

- バンドルされた Tomcat Web アプリケーションサーバを使用している場合、アップデートインストールプログラムを使用して BI プラットフォーム WAR ファイルが自動的に更新されます。追加の手順は必要ありません。
- バンドルされた Tomcat Web アプリケーションサーバを使用していない場合、アップデートインストールプログラムを使用して新規 WAR ファイルを <INSTALLDIR>/enterprise\_xi40/warfiles/webapps) にインストールし、WDeploy を使用して WAR ファイルを Web アプリケーションサーバにデプロイします。複数のアップデートをインストールする場合は、最初にすべてのアップデートをインストールしてから、1 度で再デプロイできる WAR ファイルの最終セットを最後に取得します。WDeploy の使用に関する説明については、*SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド*を参照してください。

#### i 注記

デプロイメント内のすべての BI プラットフォーム WAR ファイルを更新する必要があります。Web アプリケーションを含むすべての BI Suite コンポーネントを同じバージョンにする必要があります。

### 4.3 web.xml ファイルの変更の保存

アップデートをインストールすると、Web アプリケーションサーバにデプロイされた Web アプリケーションの web.xml ファイルが上書きされます。つまり、Web アプリケーションサーバ上の web.xml ファイルを変更することによって実行したカスタマイズが、アップデートの適用後に消失します。

Web アプリケーションの `web.xml` ファイルを変更し、その変更を保持するには、BI プラットフォームインストールディレクトリで変更を行う必要があります。BI プラットフォームのインストールディレクトリ内の設定ファイルに加えられた変更は、パッチの際も保持されます。

Windows システムで、このディレクトリは、

`<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%\warfiles\webapps` です。

UNIX システムで、このディレクトリは、

`<INSTALLDIR>/sap_bobj/enterprise_xi40/warfiles/webapps` です。

アップデートの適用後、影響のある `.war` ファイルを再ビルドし、`.war` ファイルを Web アプリケーションサーバに再デプロイします。

## 4.4 並列更新

並列更新機能は 4.0 SP5 から導入されました。この機能によって複数のマシンで同時にアップデートインストールを実行できるようになり、分散デプロイメントの更新に必要な時間が大幅に短縮されます。1 度に 1 つのマシンのみを更新する必要はなくなります。

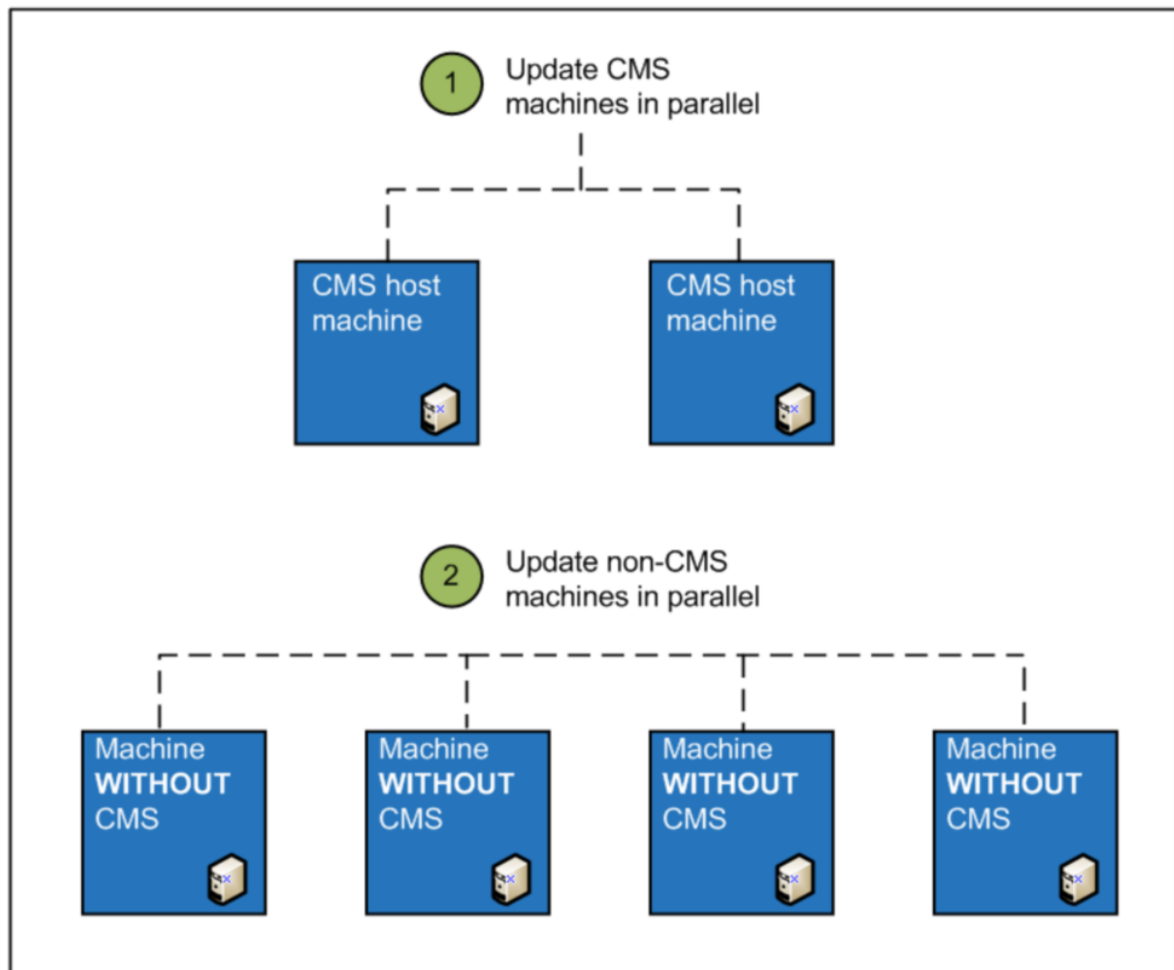
分散デプロイメントの並列更新を実行するには、次の順序でアップデートをインストールします。

1. すべての CMS ホストマシンでアップデートインストールプログラムを (同時に) 並列実行します。
  - 次のステップに進む前に、すべてのマシンの更新が終わるまで待機します。
  - CMS マシンを再起動する前に、すべての CMS マシンでアップデートインストールの実行が終了するまで待機します。アップデートインストールプログラムによって再起動を要求されても、すべての CMS マシンで更新が終了するまではマシンを再起動しないでください。
2. 非 CMS マシンの更新を開始する前に、少なくとも 1 台の CMS マシンが実行され、利用できることを確認してください。
3. すべての非 CMS マシンでアップデートインストールを並列実行します。
  - CMS へのログオンを要求されたら、ステップ 2 の CMS マシンを使用します。
  - 次のステップに進む前に、すべてのマシンの更新が終わるまで待機します。
4. すべての非 CMS マシンでアップデートのインストールが終了したら、すべての CMS マシンを再起動します。

この手順をデプロイメントのすべての製品に対して繰り返してください。これには、BI プラットフォーム、Explorer、クライアントツールなどが含まれます。製品が非 CMS マシンのみにインストールされている場合は、ステップ 1 と 2 をスキップできます。

### i 注記

- 更新中の非 CMS マシンに対し、少なくとも 1 つの CMS マシンを利用できる必要があります。
- 更新の開始時に稼働しているすべての CMS マシン、および更新中に起動した追加の CMS マシンを、更新の開始から終了まで利用する必要があります。
- 更新の実行中に CMS マシンが再起動される可能性がある追加のインストール、保守、またはサーバ管理ワークフローは、実行しないでください。



## 5 Windows での更新インストール

更新インストールを実行するには、Windows マシンの管理者権限が必要です。

更新をインストールするマシンでは、以下の例外を除いて、更新をインストールする前に、セントラル管理コンソール (CMC) を使用してマシン上のすべての BI プラットフォームサーバを停止することをお勧めします。

- Server Intelligence Agent (SIA)
- Central Management Server (CMS)
- Input/Output File Repository Server (FRS)
- CMS システム データベース

これらのサービスおよびサーバはインストールを続けるために動作し続ける必要があります。

### i 注記

Secure Sockets Layer (SSL) が有効化されている場合は、インストールを続行できません。更新をインストールするマシンで SSL が有効化されている場合は、インストールを実行する前に SSL をオフにする必要があります。インストールの完了後に、SSL をオンに戻します。

サーバコンポーネントを含む製品を更新する場合は、CMS ログオン認証情報を入力する必要があります。これは、サーバ プロパティのローカライズされた文字列など、CMS データベースに格納されているコンテンツを更新するために必要です。

### → ヒント

更新インストールの前提条件とベストプラクティスの詳細については、以下の KBA を参照してください。

- 1952120 - SAP BusinessObjects (XI 3.1 および BI 4.0) インストールの前提条件およびベストプラクティス (SAP BusinessObjects (XI 3.1 and BI 4.0) Installation pre-requisites & best practices): <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/1952120>
- 1757132 - BI4 サポートパッケージアップグレードおよびパッチ適用に関するベストプラクティスガイド (BI4 Support Pack Upgrade and Patch Install Best Practices Guide): <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/1757132>

### ⚠ 警告

更新インストールを実行する前に、特定の Windows オペレーティングシステムの更新が必要です。正確なステップの詳細については、ノート <https://launchpad.support.sap.com/#/notes/2451830> を参照してください。

### 5.1 Windows に BI プラットフォームサーバのアップデートをインストールする



1. `setup.exe` を実行してインストールを開始します。  
インストールプログラムによって、BI プラットフォームアップデートをマシンにインストールできるようにする前提条件チェックが開始されます。
2. **[前提条件チェック]** 画面で、前提条件チェックの結果を確認します。インストールを続行する場合は、**[次へ]** をクリックします。
3. **[ようこそ]** 画面で **[次へ]** をクリックします。
4. **[使用権許諾契約]** 画面で、エンドユーザ使用許諾契約の内容を確認し、契約書の内容に同意する場合は、**[次へ]** をクリックします。
5. アップデートにサーバコンポーネントが含まれている場合は、**[既存の CMS デプロイメント情報]** 画面が表示されます。使用しているデプロイメントの CMS のホスト名、ポート番号、および管理者のパスワードを入力し、**[次へ]** をクリックします。
6. **[インストールの開始]** 画面で、**[次へ]** をクリックしてインストールを開始します。  
更新が開始されます。インストールが完了すると、完了画面が表示されます。この画面には、インストール後の指示が含まれている場合があります。

#### i 注記

アップデートの一部として Web アプリケーションが更新される場合は、元の BI プラットフォームのインストール時に選択したオプションに応じて、インストール後のダイアログボックスに `.war` ファイルを再デプロイする手順が表示される場合があります。

7. **[Finish]** をクリックします。

## 5.2 Windows でクライアント製品アップデートをインストールする

この手順は、Windows 上で動作する BI プラットフォームクライアントツールのアップデートのインストールに使用されます。

#### ⚠ 警告

クライアントツールの更新によって、`InformationDesignTool.ini` および `TransMgr.ini` ファイルが上書きされます。これらの `.ini` ファイルをカスタマイズしている場合は、インストールの開始前にほかのディレクトリにコピーを保存しておくことをお勧めします。

1. `setup.exe` を実行してインストールを開始します。
2. **[次へ]** をクリックします。
3. **[ようこそ]** ダイアログボックスで、**[次へ]** をクリックして進みます。
4. **[使用権許諾契約]** ダイアログボックスで、エンドユーザ使用許諾契約の内容を確認し、契約書の内容に同意する場合は、**[次へ]** をクリックして進みます。  
アップデートにサーバコンポーネントが含まれている場合は、**[CMS]** ダイアログボックスが表示されます。
5. 使用しているデプロイメントの CMS のホスト名、ポート番号、および管理者のパスワードを入力し、**[次へ]** をクリックして先に進みます。
6. **[インストールの開始]** ダイアログボックスで、**[次へ]** をクリックしてインストールを開始します。

更新がインストールされます。インストールが完了すると、完了画面が表示されます。この画面には、インストール後の指示が含まれている場合があります。

7. [完了](#)をクリックします。

## 5.3 Windows でのサイレントインストール

### 5.3.1 Windows で応答ファイルを使用したサイレント インストールを実行する

更新は、応答ファイルを使用してサイレントインストールできます。

サイレント インストールは、特に、複数のインストールをすばやく実行したりインストールを自動化したりする場合に便利です。

応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行するには、まずセットアッププログラムを使用して .ini ファイルを作成する必要があります。 .ini ファイルを作成したら、.ini ファイルのパスを指定して `setup.exe` コマンドを実行することにより、サイレント インストールを実行できます。

#### i 注記

応答ファイルを使用してサイレントインストールを実行している場合、対象となるアップデートまたはパッチのインストールパッケージから `setup.exe` ファイルを使用して応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルは、リフレッシュインストール、アップデートインストール、またはパッチインストールの間で共有することはできません。

1. インストール .ini ファイル(応答ファイル)を作成します。
  - a. コマンドライン コンソールを開きます。
  - b. SAP BusinessObjects の `setup.exe` ファイルが保存されているディレクトリから、書き込みオプション (`-w`) を指定して `setup.exe` コマンドを実行します。

```
setup.exe -w <responsefilepath%filename.ini>
```

`<filename.ini>` は、応答ファイルに付ける名前です。`<responsefilepath>` は、作成した応答ファイルを保存する場所です。

#### i 注記

ファイル パスが指定されていない場合、ファイルは `setup.exe` が実行されたディレクトリに保存されます。インストール プログラムには、このディレクトリに対する書き込み権限が必要です。

- c. [Enter](#) キーを押して、インストール プログラムを起動します。
- d. 画面の指示に従って、[\[インストールの開始\]](#) ダイアログ ボックスに達するまで、インストール設定を入力します。
- e. [\[次へ\]](#) をクリックします。  
インストールプログラムは自動的に終了します。インストールのすべてのパラメータ(ユーザ定義のパラメータとデフォルトパラメータ)は、指定したディレクトリに保存される .ini ファイルに記録されます。

#### i 注記

GUI インストールプログラムで応答ファイルを作成する場合、GUI を介して入力したライセンスキーおよびすべてのパスワードはプレーンテキスト形式の応答ファイルには書き込まれません。サイレントインストールを実行する前に、アスタリスク (\*\*\*\*\*) の部分を実際のパスワードに置き換える必要があります。

2. 応答ファイルを編集し、適切なパスワードによってアスタリスクを置換します。
3. 以下のコマンドを使用して、.ini ファイルを使用するサイレントインストールを実行します。

```
setup.exe -r <responsefilepath¥filename.ini>.ini
```

インストールログファイルは、<INSTALLDIR>¥InstallData¥logs¥<DATEandTIME>¥ に保存されます。

## 5.4 アップデートインストールの段階的インストールを実行する

パッチアップデートの段階的インストールを実行するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. コマンドプロンプトに移動します。
2. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
3. 「setup.exe -cache <path><file name>」と入力します。

#### ❖ 例

```
setup.exe -cache c:¥response.ini
```

4. [セットアップ言語を選択してください] ウィンドウで、セットアップ言語を選択します。  
セットアップ言語を設定することにより、インストール時の情報が選択した言語で表示されるようになります。
5. 前提条件のチェックウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。  
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。
  - 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
  - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
6. インストールウィザードウィンドウで、表示された指示を確認します。
7. 使用許諾契約ウィンドウで、使用許諾契約を確認して同意します。
8. 既存の CMS デプロイメント情報ウィンドウで、[CMS ログオン管理者情報] のパスワードを入力します。
9. [インストールの開始] ウィンドウで [次へ] を選択してキャッシュを開始します。
10. [キャッシュが正常に完了しました] ダイアログが表示されます。

#### i 注記

- キャッシュ段階ではシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

- キャッシュ段階の後、メンテナンス時間があるときにインストールを実行することができます。

11. response.ini ファイルディレクトリの場所に移動します。
12. [リモート CMS 管理者パスワード] を入力し、response.ini ファイルを保存します。
13. コマンドプロンプトに移動します。
14. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
15. 「setup.exe -resume\_after\_cache <path><file name>」と入力します。

#### ❖ 例

```
setup.exe -resume_after_cache c:¥response.ini
```

16. [インストールを再開します] ウィンドウで、[OK] を選択します。
17. [インストール後の手順] ウィンドウで、指示に従って操作し、[次へ] を選択します。

SAP BusinessObjects BI プラットフォームのアップデートインストールが正常に完了します。

#### i 注記

- キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、システムダウンタイムは全体的に短縮されます。
- インストールを開始すると、インストーラによりキャッシュ中に発生したエラーが修復され、インストールが続行されます。

## 5.5 Windows でアップデートをアンインストールする

アップデートは、インストールした順序とは逆順に、一度に1つずつアンインストールできます。アップデートをアンインストールした場合は、デプロイメントを使用する前に、デプロイメント内のすべての製品が同じバージョンになっていることを確認してください。

バンドルされたバージョンの Tomcat をインストールしている場合、アップデートの WAR ファイルはアンインストールプログラムによって自動的にアンインストールされ、旧バージョンの WAR ファイルが自動的に復元されます。

バンドルされている Web アプリケーションサーバを使用していない場合は、アップデートをアンインストールする前に、すべての BI プラットフォーム Web アプリケーションをアンデプロイすることをお勧めします。アンデプロイは、手動または WDeploy ツールを使用して行うことができます。

#### i 注記

アンインストールプログラムは、CMS を 4.1 デプロイメントから 4.0 デプロイメントに戻しません。次の製品のアップデートをアンインストールする場合は、アンインストールの完了後に、CMS データベースをバックアップから手動で復元する必要があります。

- BI プラットフォーム
- 情報プラットフォームサービス
- SAP Crystal Server
- SAP BusinessObjects Explorer

1. Windows の[スタート]から[設定]をポイントし、[コントロール パネル]を選択します。
2. [プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
3. プログラムの一覧からメンテナンスエントリを強調表示して、[変更と削除]をクリックします。  
[アプリケーションのメンテナンス] ダイアログボックスが表示されます。
4. [削除]を選択して、[はい]をクリックします。
5. 適切なファイルの削除と設定が終了するまで、しばらく待ちます。[完了]をクリックします。

アップデートをアンインストールした後、<INSTALLDIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI

4.0%warfiles にある旧バージョンの WAR ファイルを Web アプリケーションサーバに再デプロイできます。デプロイメントのすべてのコンポーネントのバージョンレベルが同じである必要があります。

詳細については、Web アプリケーションデプロイメントガイドの wdeploy または手動デプロイメントの手順を参照してください。

## 6 UNIX でのアップデートインストール

このアップデートをインストールするマシンでは、以下の例外を除いて、アップデートをインストールする前に、セントラル管理コンソール (CMC) を使用してマシン上のすべての BI プラットフォームサーバを停止することをお勧めします。

- Server Intelligence Agent (SIA)
- Central Management Server (CMS)
- Input/Output File Repository Server (FRS)
- CMS システム データベース

これらのサービスおよびサーバはインストールを続けるために動作し続ける必要があります。

### i 注記

サーバコンポーネントを更新する場合は、CMS ログオン認証情報を入力する必要があります。これは、サーバ プロパティのローカライズされた文字列など、CMS データベースに格納されているコンテンツを更新するために必要です。

### i 注記

Secure Sockets Layer (SSL) が有効化されている場合は、インストールを続行できません。アップデートをインストールするマシンで、SSL が有効化されている場合は、インストールを行う前に SSL をオフにする必要があります。インストールの完了後に、SSL をオンに戻します。

### 6.1 UNIX に BI プラットフォームサーバのアップデートをインストールする

1. アップデートインストールプログラムが含まれるディレクトリから次のコマンドを実行して、インストールを開始します。  
`./setup.sh`
2. **インストールフォルダの設定**画面で、インストールディレクトリを入力します。アップデートは、フルインストールと同じディレクトリにインストールする必要があります。たとえば、BI プラットフォームのインストールでは、このディレクトリにはスクリプト `modifyOrRemoveProducts.sh` が含まれます。  
インストールプログラムによって、BI プラットフォームをマシンにインストールできるようにする前提条件チェックが開始されます。
3. **前提条件チェック**画面で、前提条件チェックの結果を確認します。インストールを続行する場合は、**Enter** キーを押します。
4. **ようこそ**画面で、**Enter** キーを押します。
5. **使用権許諾契約**画面で、**Enter** キーを押してライセンス要件に同意して続行します。
6. アップデートにサーバコンポーネントが含まれている場合は、**既存の CMS デプロイメント情報**画面が表示されます。CMS 認証情報を入力し、**Enter** キーを押して続行します。
7. **インストールの開始**画面で、**Enter** キーを押してインストールを開始します。

進行状況インジケータに、インストールのステータスが表示されます。

インストールが完了すると、メッセージが表示されます。このメッセージには、インストール後の指示も含まれている場合があります。

#### i 注記

アップデートの一部として Web アプリケーションが修正される場合は、元の BI プラットフォームのインストール時に選択したオプションに応じて、インストール後の画面に .war ファイルを再デプロイする手順が表示される場合があります。

8.  キーを押して、インストールを完了します。

インストールの詳細を確認するには、`<INSTALLDIR>/InstallData/logs/<DATEandTIME>/`にあるインストールログファイルの内容を確認します。

## 6.2 UNIX でのサイレントインストール

### 6.2.1 UNIX で応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行する

更新は、応答ファイルを使用してサイレントインストールできます。

サイレントインストールは、特に、複数のインストールをすばやく実行したりインストールを自動化したりする場合に便利です。

応答ファイルを使用したサイレントインストールを実行するには、まず応答ファイルを作成する必要があります。

次の手順では、インストールプログラムを使用して応答ファイルを作成する方法を示します。応答ファイルを作成したら、応答ファイルのパスを指定して `./setup.sh` コマンドを実行することにより、サイレントインストールを実行できます。

#### i 注記

応答ファイルを使用してサイレントインストールを実行している場合、対象となるアップデートまたはパッチのインストールパッケージから `setup.sh` ファイルを使用して応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルは、アップデートインストールとパッチインストールの間で共有することはできません。

1. 応答ファイルを作成する。
  - a. パッチインストールソースファイルが保存されているディレクトリから、書き込みオプション (`-w`) を指定して `./setup.sh` コマンドを実行します。

```
./setup.sh InstallDir=<INSTALLDIR> -w <responsefilepath/filename.ini>
```

ここで、`<INSTALLDIR>` は BI プラットフォームのインストールディレクトリで、`<responsefilepath/filename.ini>` は作成する応答ファイルのパスおよびファイル名です。

- b.  キーを押して、インストールプログラムを起動します。
- c. 画面の指示に従ってインストール設定を入力し、セットアッププログラムの [インストールの開始] ダイアログボックスが表示されたら `Enter` キーを押します。  
インストールツールが自動的に終了し、設定が応答ファイルに記録されます。

#### i 注記

GUI インストールプログラムで応答ファイルを作成する場合、GUI を介して入力したライセンスキーおよびすべてのパスワードはプレーンテキスト形式の応答ファイルには書き込まれません。サイレントインストールを実行する前に、アスタリスク (\*\*\*\*\*) の部分を実際のパスワードに置き換える必要があります。

2. 応答ファイルを編集し、適切なパスワードによってアスタリスクを置換します。
3. 以下のコマンドを使用して、.ini ファイルを使用するサイレントインストールを実行します。

```
./setup.sh InstallDir=<INSTALLDIR> -r <responsefilepath>/filename.ini  
<responsefilepath>/filename.ini は、作成する応答ファイルのパスとファイル名です。
```

インストールログファイルは、<INSTALLDIR>/InstallData/logs/<DATEandTIME>/ に保存されます。

## 6.3 UNIX でアップデートをアンインストールする

アップデートは、インストールした順序とは逆順に、一度に1つずつアンインストールできます。アップデートをアンインストールした場合は、デプロイメントを使用する前に、デプロイメント内のすべての製品が同じバージョンになっていることを確認してください。

バンドルされたバージョンの Tomcat に WAR ファイルをインストールした場合、それらのファイルはアンインストールプログラムによって自動的にアンインストールされ、旧バージョンの WAR ファイルが自動的に復元されます。

バンドルされている Web アプリケーションサーバを使用していない場合は、アップデートをアンインストールする前に、すべての BI プラットフォーム Web アプリケーションをアンデプロイすることをお勧めします。アンデプロイは、手動または WDeploy ツールを使用して行うことができます。

#### i 注記

アンインストールプログラムは、CMS を 4.1 デプロイメントから 4.0 デプロイメントに戻しません。次の製品のアップデートをアンインストールする場合は、アンインストールの完了後に、CMS データベースをバックアップから手動で復元する必要があります。

- BI プラットフォーム
- 情報プラットフォームサービス
- SAP Crystal Server
- SAP BusinessObjects Explorer

1. アップデートをアンインストールするには、BI プラットフォームのインストールディレクトリから次のコマンドを実行します。

```
./modifyOrRemoveProducts.sh
```

[プログラムの追加と削除] ダイアログボックスが表示されます。

2. 削除するアップデートを選択し、**Enter** キーを押します。  
Central Management Server 認証情報の入力求められます。
3. CMS 認証情報を入力し、**Enter** キーを押して続行します。



4. **[製品をアンインストールします]**を選択し、**Enter** キーを押します。  
確認ダイアログボックスが表示されます。
5. **はい**を選択し、**Enter** キーを押します。  
アンインストール処理が開始されます。

アップデートをアンインストールした後、**<INSTALLDIR>/sap\_bobj/enterprise\_xi40/warfiles**にある旧バージョンの WAR ファイルを Web アプリケーションサーバに再デプロイできます。デプロイメントのすべてのコンポーネントのバージョンレベルが同じである必要があります。

4.1 アップデートインストールから 4.0 インストールに戻すには、4.0 データベースをバックアップから復元する必要があります。SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイドを参照してください。

詳細については、Web アプリケーションデプロイメントガイドの WDeploy または手動デプロイメントの手順を参照してください。

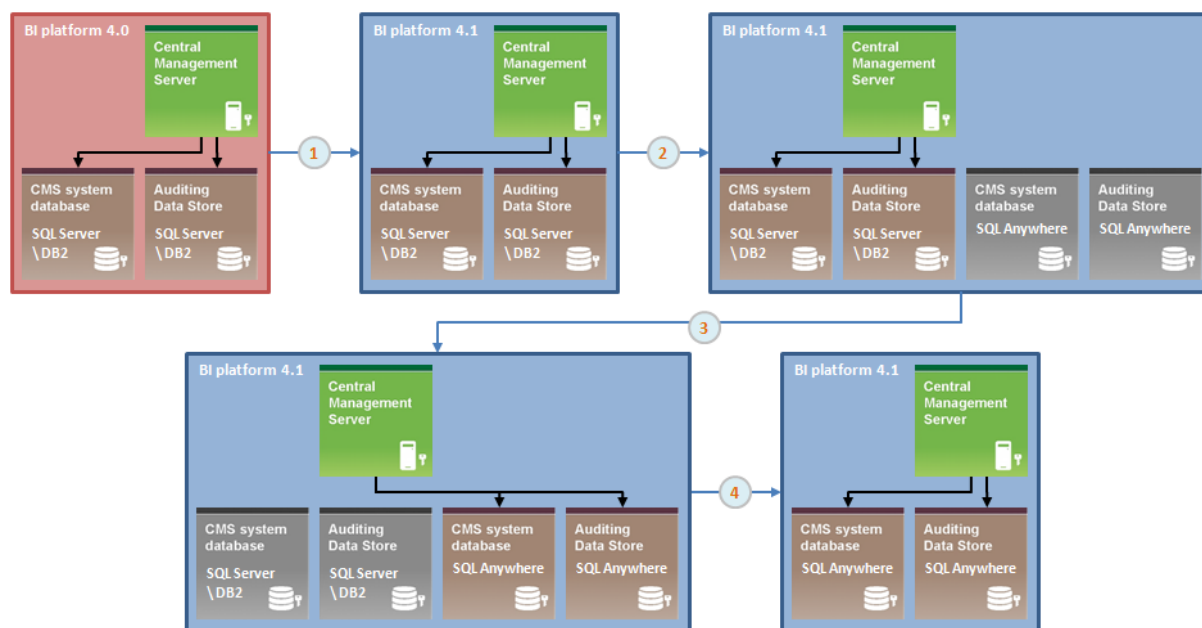
## 7 Sybase SQL Anywhere への移行

4.1 BI プラットフォーム完全インストールプログラムにおける Central Management Server (CMS) および監査データストア (ADS) のバンドルされたデフォルトデータベースが、Sybase SQL Anywhere です。アップデートインストールプログラムを使用してデプロイメントを 4.0 から 4.1 に更新した場合、およびバンドルされた IBM DB2 Workgroup Edition (UNIX) または Microsoft SQL Server 2008 Express (Windows) データベースサーバを使用する場合、これらのデータベースサーバは CMS および監査データベース用に保持されます。追加のアクションを実行せず、これらのバンドルされたデータベースサーバを引き続き使用できます。または、この節に記載されている手順に従って、既存のデータベースを Sybase SQL Anywhere に移行できます。

### ⚠ 警告

この節には、CMS データの新しいデータベースサーバへのコピーと、既存のデータベースサーバおよびデータの削除を含む手順が記載されています。続行する前に、既存のデータベースサーバをバックアップします。

以下は、CMS データベースの移行ワークフローです。



Sybase SQL Anywhere 移行ワークフロー

- 4.1 アップデートインストールプログラムを使用して、4.0 BI プラットフォームインストールを 4.1 に更新します。  
4.0 BI プラットフォームインストールへの 4.1 マイナーリリースアップデートの適用に関する指示については、本ガイドのアップデートインストール指示を参照してください。
- 4.1 インストールを変更し、Sybase SQL Anywhere 機能を選択およびインストールします。
- セントラル設定マネージャ (CCM) を使用して CMS データベースのコンテンツを既存のバンドルされたデータベースから Sybase SQL Anywhere にコピーし、CMS および監査データベースをアクティブサーバとして SQL Anywhere にポイントします。

## ！制限

過去の監査データは、過去のバンドルされたデータベースに格納されたままであり、このデータを Sybase SQL Anywhere に移行するツールは提供されていません。

4. Microsoft SQL Server 2008 Express (Windows) または IBM DB2 Workgroup Edition (UNIX) を、コマンドラインを使用してアンインストールします。

## 関連情報

[4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する \(Windows\) \[27 ページ\]](#)

[CMS データを SQL Anywhere にコピーする \(Windows\) \[28 ページ\]](#)

[Microsoft SQL Server 2008 Express を削除する \[31 ページ\]](#)

[4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する \(UNIX\) \[32 ページ\]](#)

[CMS データを SQL Anywhere にコピーする \(UNIX\) \[33 ページ\]](#)

[IBM DB2 Workgroup Edition を削除する \[35 ページ\]](#)

## 7.1 Microsoft SQL Server 2008 Express から

### 7.1.1 4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する (Windows)

このタスクは、4.1 アップデートインストールプログラムを使用して 4.0 インストールを更新しており、CMS および監査データベースに対してバンドルされた Microsoft SQL Server 2008 Express を引き続き使用していることを想定しています。

BI プラットフォームサーバイnstall が 4.1 レベルになったら、Sybase SQL Anywhere のバンドルされたデータベースをインストールに追加します。

1. **スタート** > **コントロールパネル** > **プログラムと機能** の順に選択します。
2. **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4.0** (ベースレベル) を右クリックし、**アンインストールと変更** を選択します。  
更新ではなく、変更するベースの 4.0 完全インストールを選択する必要があります。たとえば、**SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4.0 SP4** を選択します。



(英語の例)

3. **[アプリケーションのメンテナンス]** ページで **[変更]** を選択し、**[次へ]** を選択します。
4. **[言語パックの選択]** ページで **[次へ]** をクリックし、続行します。
5. **機能の選択** ページで、**Sybase SQL Anywhere データベース** (**サーバ** > **プラットフォームサービス**) を選択し、**次へ** をクリックして変更を適用します。

6. [\[Sybase SQL Anywhere の設定\]](#) ページで、新しいデータベースサーバのアカウントパスワードおよびポート情報を選択します。

データベースアカウントパスワードは、後でセントラル設定マネージャ (CCM) で入力する必要があります。受信データベースクエリをリスニングする Sybase SQL Anywhere のデフォルトポートは、2638 です。データベースがこのポートまたは指定したカスタムポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

[\[インストールの開始\]](#) ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールの完了後、バンドルされた Sybase SQL Anywhere データベースがマシンにインストールされます。Microsoft SQL Server 2008 Express データベースサーバが、引き続きすべての既存データを含むアクティブな CMS および監査データベースです。CMS データベースを SQL Anywhere にコピーする (Windows)に進んでください。

## 7.1.2 CMS データを SQL Anywhere にコピーする (Windows)

### ⚠ 警告

データをコピーする前に、既存 CMS データベースのバックアップなどの準備ステップを実行することが推奨されます。詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「*CMS システムデータベースのコピーの準備*」を参照してください。

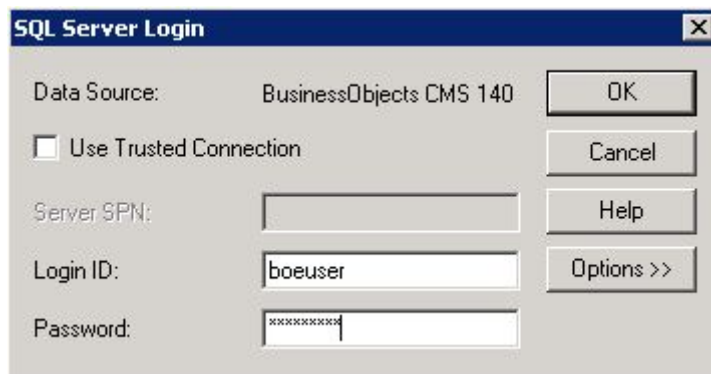
CMS データベースのコンテンツをコピーする前に、4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加するで設定したアカウントを使用して、出力先の SQL Anywhere データベースにログオンできることを確認してください。

セントラル設定マネージャ (CCM) を使用して、CMS データを Microsoft SQL Server 2008 Express から Sybase SQL Anywhere にコピーします。この手順で使用される以下のデータベース情報を確認してください。

オプション	SQL Server Express (ソース)	SQL Anywhere (出力先)
CMS ODBC データソース名 (DSN)	BusinessObjects CMS 140	BI4_CMS_DSN
データベースアカウント	boeuser	dba
データベースアカウントパスワード	4.0 インストールプロセスで指定	4.1 変更インストールプロセスで指定
CMS クラスターキー	4.0 インストールプロセスで指定	4.0 インストールプロセスで指定

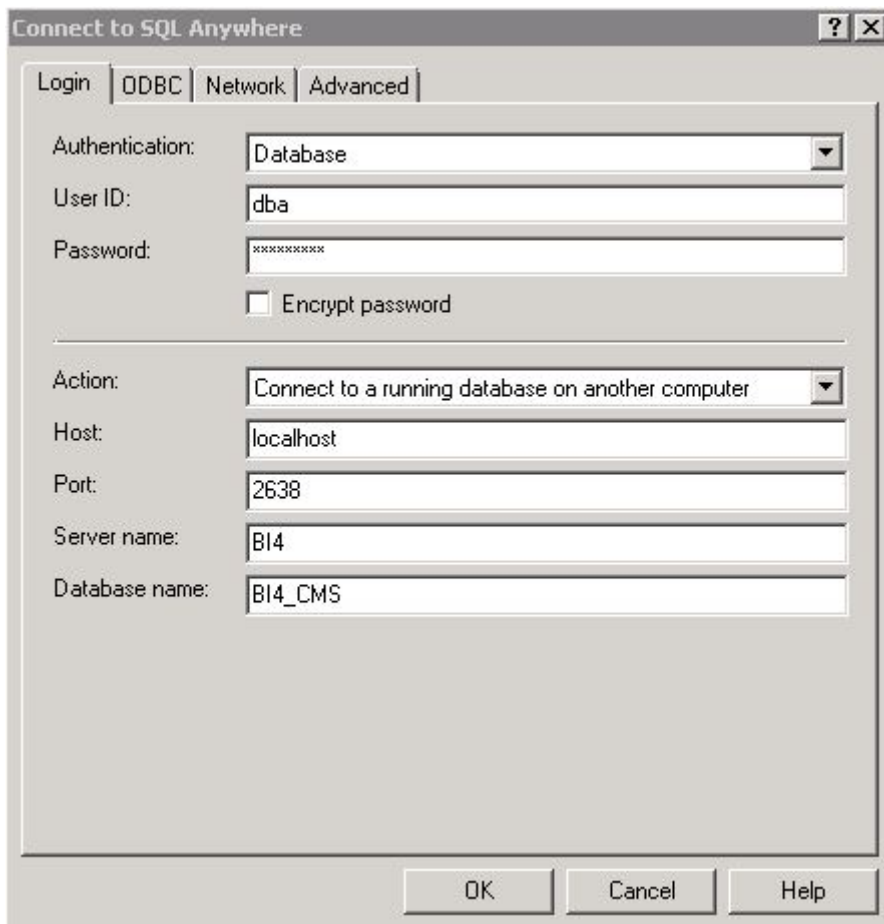
- CCM を実行するには、**スタート** > **すべてのプログラム** > **SAP Business Intelligence** > **SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4** > **セントラル設定マネージャ** を選択します。
- リストされたサーバをすべて選択し、**[停止]** ボタンをクリックします。
- Server Intelligence Agent (SIA) が停止した後、SIA を右クリックし、**[プロパティ]** を選択します。
- [設定]** タブをクリックし、**[指定]** をクリックします。
- [別のデータソースからデータをコピー]** を選択して、**[OK]** をクリックします。
- ソース CMS データベース (Microsoft SQL Server 2008 Express) のデータベースタイプを選択します。
  - [データソースの指定]** ページで、**[指定]** をクリックします。
  - [SQL Server (ODBC)]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
  - [マシンデータソース]** タブで **[BusinessObjects CMS 140]** を選択し、**[OK]** をクリックします。

- d. [\[SQL Server ログイン\]](#) ページで、データベース管理者アカウントのユーザ名とパスワードを入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。



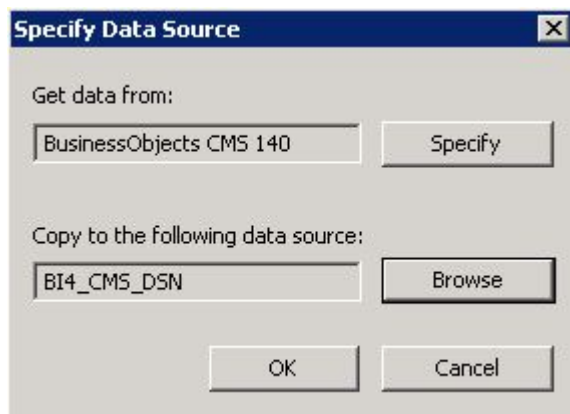
(英語の例)

- e. 指示に応じてクラスタキーを入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。
7. 出力先 CMS データベース (Sybase SQL Anywhere) のデータベースタイプを選択します。
- [\[データソースの指定\]](#) ページで、[\[参照\]](#) をクリックします。
  - [\[SQL Anywhere \(ODBC\)\]](#) を選択し、[\[OK\]](#) をクリックします。
  - [\[マシndataソース\]](#) タブで [\[BI4\\_CMS\\_DSN\]](#) を選択し、[\[OK\]](#) をクリックします。
  - [\[SQL Anywhere に接続\]](#) ページで、データベース管理者アカウントのパスワードを入力し、[\[OK\]](#) をクリックします。



(英語の例)

- e. 指示に応じてクラスタキーを入力し、[OK] をクリックします。
8. [データソースの指定] ページで [OK] をクリックし、警告ダイアログボックスを確認します。



(英語の例)

9. [はい] をクリックして CMS データのコピーを開始します。CMS データベースのコピーが完了したら、[OK] をクリックします。

コピー手順が完了すると、出力先データベースが CMS の現在のデータベースとして設定されます。SIA を再起動し、新しい Sybase SQL Anywhere CMS データベースを使用して 4.1 BI プラットフォームインストールをテストします。

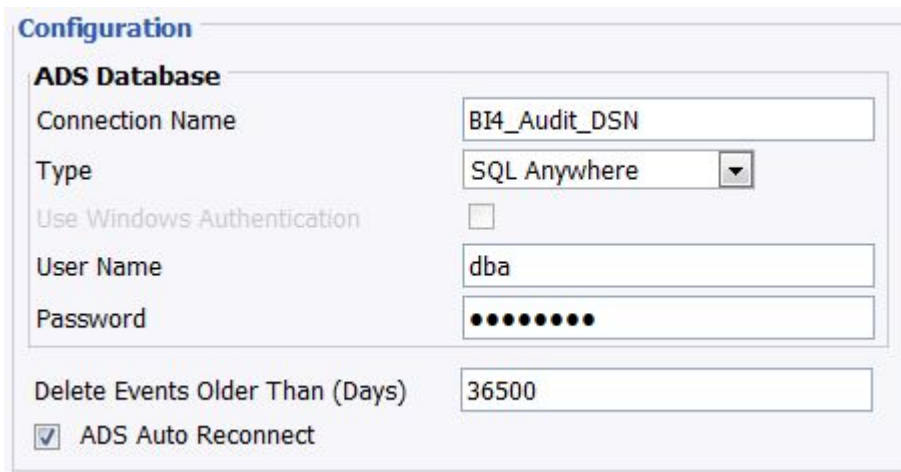
#### → ヒント

現在の CMS データベースサーバ詳細を参照するには、CCM で SIA を右クリックし、[プロパティ] を選択します。[設定] タブに詳細が一覧表示されます。

また、新しいデータが Sybase SQL Anywhere に書き込まれるよう、監査データストア (ADS) を設定することもできます。セントラル管理コンソール (CMC) にログインし、[監査] ページで [設定] 見出しの下に Sybase SQL Anywhere ODBC DSN (BI4\_Audit\_DSN) およびアカウント詳細を入力します。[保存] をクリックし、CMS を再起動します。

#### ! 制限

過去の監査データは、Microsoft SQL Server 2008 Express データベースに格納されたままであり、このデータを Sybase SQL Anywhere に移行するツールは提供されていません。



CMC 監査設定 (英語の例)

テストが問題なく完了したら、バンドルされた Microsoft SQL Server 2008 Express を完全に削除できます。Microsoft SQL Server 2008 Express を削除するに進んでください。

## 7.1.3 Microsoft SQL Server 2008 Express を削除する

#### ⚠ 警告

この手順では、Microsoft SQL Server 2008 Express のインストールが削除されます。続行する前に、すべてのデータをバックアップしており、Sybase SQL Anywhere を含む BI プラットフォームデプロイメントのテストを行っていることを確認してください。CMS および監査データベースファイル (.db) は、`BIP_INSTALL_DIR¥sqlanywhere¥database.backup.DATE¥` に残ります。

1. コマンドプロンプトを開き、`setup.exe` プログラムを含むフォルダに移動します。  
デフォルトでは、このフォルダは `<INSTALLDIR>` です。

2. 次のコマンドを実行します。

```
setup.exe -q -i product.businessobjects64-4.0-core-32 RemoveIDB=1  
MaintenanceMode=modify
```

データベースサーバがシステムからアンインストールされます。

## 7.2 IBM DB2 Workgroup Edition から

### 7.2.1 4.1 インストールを変更し、SQL Anywhere を追加する (UNIX)

このタスクは、4.1 アップデートインストールプログラムを使用して 4.0 インストールを更新しており、CMS および監査データベースに対してバンドルされた IBM DB2 Workgroup Edition を引き続き使用していることを想定しています。

BI プラットフォームサーバインストールが 4.1 レベルになったら、Sybase SQL Anywhere のバンドルされたデータベースをインストールに追加します。

#### i 注記

インストールを変更するためには、CMS を実行する必要があります。

1. <INSTALLDIR> フォルダにディレクトリを移動し、次のコマンドを実行します。

```
./modifyOrRemoveProducts.sh
```

2. **追加または削除する製品の選択** ページで、BI プラットフォームインストールのベースレベルを選択して **Enter** を押します。

4.0 インストールを 4.1 に更新するため、更新ではなく、変更するベースの 4.0 完全インストールを選択する必要があります。たとえば、*SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4.0 SP4* を選択します。

```
Add or Remove Product Selection  
Please select from the following installed products.  
  
1 - SAP BusinessObjects BI platform 4.0 SP5 update  
2 - SAP BusinessObjects BI platform 4.1 update  
3 - SAP BusinessObjects BI platform 4.0 SP4
```

(英語の例)

3. **アプリケーションのメンテナン**スページで、**変更**を選択して **Enter** を押します。
4. **言語パックの選択** ページで、**Enter** を押して続行します。
5. **機能の選択** ページで、*Sybase SQL Anywhere データベース* ( **サーバ** > **プラットフォームサービス** ) の下) を選択し、**Enter** をクリックして変更を適用します。
6. *[Sybase SQL Anywhere の設定]* ページで、新しいデータベースサーバのアカウントパスワードおよびポート情報を選択します。



データベースアカウントパスワードは、後で CMS データのコピー時に入力する必要があります。受信データベースクエリをリスニングする Sybase SQL Anywhere のデフォルトポートは、2638 です。データベースがこのポートまたは指定したカスタムポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールの完了後、バンドルされた Sybase SQL Anywhere データベースがマシンにインストールされます。IBM DB2 Workgroup Edition データベースサーバが、引き続きすべての既存データを含むアクティブな CMS および監査データベースです。CMS データベースを SQL Anywhere にコピーする (UNIX)に進んでください。

## 7.2.2 CMS データを SQL Anywhere にコピーする (UNIX)

### ⚠ 警告

データをコピーする前に、既存 CMS データベースのバックアップなどの準備ステップを実行することが推奨されます。詳細については、*Business Intelligence* プラットフォーム管理者ガイドの「CMS システムデータベースのコピーの準備」を参照してください。

CMS データベースのコンテンツをコピーする前に、4.1 アップデートインストールプログラムで設定したアカウントを使用して、出力先 SQL Anywhere データベースにログオンできることを確認してください。

cmsdbsetup.sh スクリプトを使用して、CMS データを IBM DB2 Workgroup Edition から Sybase SQL Anywhere にコピーします。この手順で使用される以下のデータベース情報を確認してください。

オプション	DB2 (ソース)	SQL Anywhere (出力先)
CMS ODBC データソース名 (DSN)	BOE14	BI4_CMS_DSN<Unix timestamp>
データベースアカウント	(空白)	dba
データベースアカウントパスワード	(空白)	4.1 変更インストールプロセスで指定
クラスタキー	4.0 インストールプロセスで指定	4.0 インストールプロセスで指定

SQL Anywhere CMS DSN では、名前 BI4\_CMS\_DSN の末尾に UNIX タイムスタンプが付けられます。たとえば、BI4\_CMS\_DSN1369176900 のようになります。正確な DSN については、ODBC システムファイル (例: <INSTALLDIR>/sap\_bobj/enterprise\_xi40/odbc.ini) を参照してください。

1. <INSTALLDIR>/sap\_bobj に移動し、IBM DB2 Workgroup Edition (コピー元) と Sybase SQL Anywhere (コピー先) の各データベースサーバを起動します。

```
./db2startup.sh
./sqlanywhere_startup.sh
```

2. CCM を使用して Server Intelligence Agent (SIA) を停止します。

```
./ccm.sh -stop <nodename>
```

3. ./cmsdbsetup.sh を実行し、SIA ノードの名前を指定して、**Enter** を押します。

BOE14 の現在の CMS データソースが表示される必要があります (IBM DB2 Workgroup Edition の ODBC DSN)。すべてのノード名のリストを表示するには、<INSTALLDIR>/sap\_bobj/serverconfig.sh を実行して、オプション **8** を入力します。

4. を入力し、**コピー**オプションを選択して、を押します。
5. を入力し、**はい**オプションを選択して続行し、を押します。
6. を入力し、**いいえ**オプションを選択して、を押します。  
現在の BOE14 ODBC DSN (IBM DB2 Workgroup Edition) は、出力先ソースとして使用しません。出力先ソースは SQL Anywhere にする必要があります。
7. を入力し、**SQLAnywhere**を選択して、コピー先の CMS データベース (Sybase SQL Anywhere) の接続の詳細を入力します。
  - a. Sybase SQL Anywhere ODBC DSN として BI4\_CMS\_DSN<Unix timestamp>を入力し、を押します。
  - b. ユーザ名として dba を入力し、を押します。
  - c. "dba" 管理者アカウントのパスワードを入力し、を押します。
  - d. クラスターキーを入力し、**Enter** キーを押します。
8. を入力し、**DB2**を選択して、コピー元の CMS データベース (IBM DB2 Workgroup Edition) の接続の詳細を入力します。
  - a. IBM DB2 Workgroup Edition ODBC DSN として BOE14 (デフォルト値) を入力し、を押します。
  - b. データベース管理者アカウントのユーザ名を空白のままにし、**Enter** キーを押します。
  - c. データベース管理者アカウントのパスワードを空白のままにし、**Enter** キーを押します。
  - d. クラスターキーを入力し、**Enter** を押します。

コピー手順が完了すると、出力先データベースが CMS の現在のデータベースとして設定されます。SIA を再起動し、新しい Sybase SQL Anywhere CMS データベースを使用して 4.1 BI プラットフォームインストールをテストします。

#### → ヒント

現在の CMS データベースサーバの詳細を表示するには、<INSTALLDIR>/sap\_bobj/cmsdbsetup.sh を実行して SIA ノードの名前を入力します。現在の CMS データソースが、次の画面で一覧表示されます。

また、新しいデータが Sybase SQL Anywhere に書き込まれるよう、監査データストア (ADS) を設定することもできます。セントラル管理コンソール (CMC) にログインし、**[監査]** ページで **[設定]** 見出しの下に Sybase SQL Anywhere ODBC DSN (BI4\_Audit\_DSN) およびアカウント詳細を入力します。**[保存]** をクリックし、CMS を再起動します。

#### ! 制限

過去の監査データは、IBM DB2 Workgroup Edition データベースに格納されたままであり、このデータを Sybase SQL Anywhere に移行するツールは提供されていません。

CMC 監査設定 (英語の例)

テストが問題なく完了したら、バンドルされた IBM DB2 Workgroup Edition を完全に削除できます。IBM DB2 Workgroup Edition を削除するに進んでください。

## 7.2.3 IBM DB2 Workgroup Edition を削除する

### ⚠ 警告

この手順では、すべての CMS および監査データを含む IBM DB2 Workgroup Edition のインストールを削除します。続行する前に、すべてのデータをバックアップしており、SQL Anywhere を含む BI プラットフォームデプロイメントのテストを行っていることを確認してください。CMS および監査データベースファイル (.db) のバックアップは、`<BIP_INSTALL_DIR>/sqlanywhere/database.backup.<DATE>/` に残ります。

1. コマンドプロンプトを開き、BI プラットフォーム `setup.sh` プログラムを含むフォルダに移動します。  
デフォルトでは、このフォルダは `<<INSTALLDIR>>` です。
2. 次のコマンドを実行します。



```
./setup.sh -q -i product.businessobjects64-4.0-core-32 RemoveIDB=1
MaintenanceMode=modify
```

データベースサーバがシステムからアンインストールされます。

# 重要免責事項および法的情報

## ハイパーリンク

リンクの一部は、アイコンやマウスオーバーテキストで分類されています。これらのリンクから、追加の情報を得ることができます。アイコンについて。

-  このアイコンが付いたリンク: SAP がホストしているものではない Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り) 以下のことに同意することになります。
  - リンク先のサイトのコンテンツが SAP のドキュメンテーションではないこと。お客様は、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできません。
  - SAP が、リンク先のサイトのコンテンツについて同意することも反対することもなく、また SAP がその利用可能性や正確性について保証しないこと。SAP は、かかるコンテンツの使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。
-  このアイコンが付いたリンク: 当該の特定の SAP 製品又はサービスのドキュメンテーションから離れ、SAP がホストしている Web サイトに移動します。これらのリンクを使用することで、お客様は (お客様と SAP との契約書に別段の明示的な記載がない限り)、この情報に基づいて SAP に対する製品クレームを推断することはできないことに同意します。

## ベータおよびその他の試験的機能

試験的機能は、SAP が将来のリリースを保証する正式に提供される機能の範囲外です。これは、試験的機能は、SAP により通知なく理由の如何を問わず随時変更される場合があることを意味します。試験的機能は、本稼働使用のためのものではありません。お客様は、試験的機能を実際の運用環境で、又は十分なバックアップがとられていないデータとともに、デモンストレーション、テスト、試験、評価その他の方法で使用してはなりません。

試験的機能の目的は、早期にフィードバックを得ることで、それに応じて顧客の皆様やパートナーが将来の製品に影響を与えることを可能にすることです。SAP コミュニティなどにおいてフィードバックを提供することで、お客様は、投稿物や二次的著作物の知的財産権が SAP の独占的所有物であり続けることを承認することになります。

## コード例

ソフトウェアのコーディングやコードスニペットはすべて、例です。それらは、本稼働使用のためのものではありません。コード例は、構文や表現規則を分かりやすく説明し視覚化することのみを目的としています。SAP は、コード例の正確性や完全性について保証しません。SAP は、コード例の使用により発生した過誤や損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、損害に対して一切責任を負いません。

## 性別関連の文言

SAP は、一方の性に特化した語形や記述を用いないようにしています。文脈や読みやすさのために適切な場合、SAP ではすべての性別を指すために男性形の語句を使用する場合があります。



© 2018 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。

SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなして、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱落等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE (又は SAP の関連会社) の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他すべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する詳細の情報や通知については、<https://www.sap.com/japan/about/legal/trademark.html> をご覧ください。